

各関係機関・団体長 様

愛媛県病害虫防除所長

病害虫防除技術情報（第 1 号）の送付について

このことについて、次のとおりお知らせしますので、御参照の上、発生の確認と防除指導方よろしくお願ひします。

記

1 情報の内容 サトイモ疫病の早期発見と防除の徹底について

2 発生経過

平成 29 年 7 月 7 日、本年の県内におけるサトイモ疫病の初発生を確認した。本病は、平成 27 年に県内での発病が初めて確認され、平成 28 年は、発病地域の拡大が見られた。昨年までは発病時期が遅かったため、大きな減収には至っていないが、宮崎県では収穫量が前年の 60%にまで減収した。

3 被害の特徴と発生生態

- (1) 本病原菌は、サトイモ属にのみ感染し、葉では、比較的大きな褐色楕円形の輪紋病斑が発生する。葉柄では、はじめシミ状の黒褐色斑が見られ、病斑が拡大するとこの部分から折れて葉が垂れ下がる（写真）。発病後、高温で雨が連続すると茎葉は短期間に腐敗消失する。イモの腐敗は少ないが、発病時期が早まると茎葉の消失によるイモの肥大不良により大きな減収を招く。
- (2) 高温（25℃以上）で連続した降雨（梅雨後期、秋雨、台風の接近による強風雨など）で発病しやすい。好適条件下では感染力が強く、短期間に発生地域が拡大するなど、他の疫病被害に比べても類を見ないほど、感染スピードの速い病害と言える。
- (3) 第一次伝染源は、土壌中の残渣や種芋の可能性が高く、第二次伝染は、葉や茎の病斑上に形成される病原菌（遊走子）の風雨による飛散やうね間の水を介しての伝染と推察される。
- (4) 発病の拡大は、気象条件（台風等による強風雨や夏場の連続降雨）が整うと予想以上に広範囲へと及ぶので、未発生地域でも発病には十分注意する。
- (5) 本県で栽培されている主要品種（愛媛農試 V2 号、赤芽、媛かぐや）、他県では石川早生で発病を確認している。

4 当面の防除対策

- (1) 発病に好適な気象条件が予想される場合には、ジーファイン水和剤による定期的な予防散布を行う。
- (2) 平均気温が 25℃を越え、数日間降雨が続いた 1 週間後頃に病徴が発現しやすくなるので、葉や茎の病徴（写真）の有無を確認する。
- (3) 発病が確認された場合や台風の通過後に茎葉が損傷した場合には、発病茎葉をほ場外に持ち出し（袋に入れて密閉）、ほ場内の菌密度を下げ、直ちに治療剤であるアミスター 20フロアブルを散布する（表 1）。なお、本剤は、耐性菌が発生しやすいので連用は避ける。
- (4) サトイモの茎葉は水をはじきやすく薬剤が付着しにくいので、展着剤を必ず加用して薬剤散布を行う。

なお、サトイモ疫病の防除体系は表 2 のとおりです。



写真 サトイモ疫病の病徴

表1 サトイモで使用できる殺菌剤

薬剤名	作物名	適用病害名	希釈倍数	使用水量	使用時期	本剤の使用回数	使用方法
ジーファイン水和剤	さといも	疫病	1000倍	150～500 ℓ/10a	収穫前日まで	—	散布
アミスター20フロアブル	さといも	疫病	2000倍	150～300 ℓ/10a	収穫14日前まで	3回以内	散布

表2 サトイモ疫病の防除体系（案）

